

令和五年度
座間市福祉推進作文・標語
入賞作品集

令和五年度座間市福祉推進作文・標語入賞作品集

目次

福祉推進作文

【小学校3・4年生の部 最優秀賞】

きもち

ひばりが丘小学校 3年 ^{みやもと}宮本 ^{いつき}樹希 2

【小学校5・6年生の部 最優秀賞】

手話教室の小松さん

ひばりが丘小学校 6年 ^{ゆかわ}湯川 ^{めい}芽衣 3

【中学生の部 最優秀賞】

視点を変えてみると

西中学校 2年 ^{いしはら}石原 ^{みさき}美咲 5

【小学校3・4年生の部 優秀賞】

福祉マーク

ひばりが丘小学校 4年 ^{いのうえ}井上 ^{みお}ハマーシャ光桜 8

【小学校3・4年生の部 優秀賞】

「介助犬と一しょ」

東原小学校 4年 ^{こぼり}小堀 ^{ふうか}楓佳 10

【小学校5・6年生の部 優秀賞】

周りの人のやさしさ

相武台東小学校 5年 ^{まえむら}前村 ^{うみ}羽海 12

【小学校5・6年生の部 優秀賞】

「階段から落ちたおじいちゃん」

立野台小学校 6年 ^{くらし}倉石 ^{かな}佳奈 14

【中学生の部 優秀賞】

「見えない不自由」を伝えたい

栗原中学校 1年 池田^{いけだ} 麻莉佳^{まりか}.....16

【中学生の部 優秀賞】

私達はみんな同じ

栗原中学校 1年 後藤^{ごとう} 暖乃^{のの}.....19

【小学校3・4年生の部 佳作】

車椅子の人のための市のくふう

相模野小学校 4年 向井^{むかい} 奏帆^{かなほ}.....21

【小学校3・4年生の部 佳作】

高れい者への思いやり

相武台東小学校 4年 平澤^{ひらさわ} 心咲^{みさき}.....22

【小学校3・4年生の部 佳作】

人のやくに立つ人

東原小学校 3年 山本^{やまもと} 玲菜^{れいな}.....23

【小学校3・4年生の部 佳作】

「うでのない人」

立野台小学校 3年 佐藤^{さとう} 志歩^{しほ}.....25

【小学校5・6年生の部 佳作】

小さな一歩は大きな助け

座間小学校 5年 郎^{ろう} 林溪^{りんけい}.....26

【小学校5・6年生の部 佳作】

募金の大切さ

相武台東小学校 6年 井上^{いのうえ} 柚菜^{ゆま}.....27

【小学校5・6年生の部 佳作】

私の思う「みんなの幸せ」

入谷小学校6年 ^{わたなべ}渡邊 ^{ななこ}奈那子28

【中学生の部 佳作】

小さな気づかい

東中学校2年 ^{もはら}茂原 ^{ゆづき}柚月30

【中学生の部 佳作】

知るということ

東中学校2年 ^{もとはし}本橋 ^{かのん}夏音32

【中学生の部 佳作】

お父さんの仕事

栗原中学校1年 ^{こが}古賀 はるの34

福祉推進標語

【最優秀賞】

つづいてる やさしさのバトン あなたの番

座間小学校3年 ^{みしま}三島 ^{みずは}瑞葉37

【優秀賞】

優しさが しあわせ生み出す 原動力

東中学校1年 ^{かねこ}金子 ^{えり}愛理37

多様性 理解深める 思いやり

東中学校1年 ^{そめや}染谷 まりの37

【佳作】

だいじょうぶ？ そのきづか이가 だい一歩

ひばりが丘小学校4年 ^{ながの}永野 ^{ゆうき}優姫37

「お手伝いしましょうか」の一言で 笑顔あふれる 座間の街 栗原中央在住 安藤 ^{あんどう} 史郎 ^{しろう}	37
勇気だし 声をあげよう 手をのばそう わかってくれる 人がいる 緑ヶ丘在住 高田 ^{たかだ} 孝子 ^{たかこ}	37
まわりのひとにやさしくされたよ わたしもみんなにやさしくしたい 東原在住 レスコ 摩耶 ^{まや}	38

※ 敬称略

※ 本文中の表記については、原文を尊重しています。

福祉推進作文

【小学校3・4年生の部 最優秀賞】

きもち

ひばりが丘小学校3年 宮本 樹希

ぼくは、福祉について分からないことがたく山ありました。福祉についてべんきょうするために、ひいおばあちゃんに話を聞きに行ってきました。

ひいおばあちゃんは、自分も年をとっているのに一人でひいおじいちゃんの面どうをみていました。ひいおばあちゃん自しん、物わすれが多くなってきていたもので、ろうろうかいごが大へんだったそうです。そこで福祉サービスをり用することになりました。

デイサービスとショートステイです。デイサービスとは、高れい者があつまって一日楽しくすごす場所で、ショートステイとは、体のふ自由な高れい者がとまることが出来る場所だそうです。

福祉をうけて、ひいおばあちゃんは、時間と気もちによゆうがもてるようになりました。福祉をうけながらひいおじいちゃんをみとって、福祉があったからおだやかに見おくることができ、大へんありがたく思っているそうです。

ぼくは、ひいおばあちゃんって大へんだったんだな、と思いました。しっかりせきにんをもってひいおじいちゃんのめんどうを見てくれている人がいるから、あんしんして自由な時間がもてたと思います。ひいおじいちゃんは福祉をうけて、しあわせな人生だったと思いました。

【小学校5・6年生の部 最優秀賞】

手話教室の小松さん

ひばりが丘小学校6年 湯川 芽衣

私は最近、手話教室に通い始めました。その先生は耳がきこえない小松さんという方です。「手話、やったことないから、先生が手話で何を言っているのか分からない。どうしよう。」と不安でいっぱいでしたが、ていねいに通訳してくれる先生もいて、その方が、小松さんが何を伝えているのか、声にして教えてくれます。

私は、手話教室に通う前は「障害をもっている人ってかわいそうだ」という考えがありました。ですが、小松さんからは、そんなことが一ミリも伝わってきません。むしろ、とても元気で明るく「私は幸せだ。」とおっしゃるくらいです。そして、いつも笑顔です。

もう一つ、想像とちがうことがありました。手話教室に通うまで、耳が聞こえない人に会ったことがなかった私は、「耳がきこえなかったら顔がムスツとしているのだろう」と勝手に思っていました。ですが、想像と全くちがい、小松さんはとても表情豊かで面白い人です。

小松さんから「手話で一番大切なのは、表情だよ。がんばろうね。」と言われました。小松さんは手だけではなく、顔や上半身の動きを上手に交えて、私達に語りかけてくれます。そして、私の目を優しく見つめながら、私が伝えたいことを聞いてくれます。小松さんと会話をしていると、優しい気持ちになります。

私は、声にしなくても、表情から気持ちが伝えられるこ

と、しっかり目を見てコミュニケーションをとると、気持ちを通じ合うことを小松さんから教わった気がします。

今は色々な手段でコミュニケーションがとれる時代です。画面だけのやりとりだけでなく、目を見て、相手を思いながらのコミュニケーションを大切にしていきたいです。

【中学生の部 最優秀賞】

視点を考えてみると

西中学校 2年 石原 美咲

私は、昨年度学校で行われた福祉体験で車椅子の試乗をしたので、車椅子について調べました。車椅子を利用している方が日常生活でどんなときに不便を感じ、それがどう改善されているのかを知りたいと思ったからです。

車椅子は主に歩行の不自由な方の移動を補助し、より円滑に社会生活を送るために利用されている道具です。また、近年ではスポーツなどにも使われています。

車椅子には大きく分けて二つの種類があります。一つ目は手動式です。手動式には自助式と介助式があり、自助式は利用者が後輪（ハンドリム）を操作し、介助式は介助者が後押しして移動します。二つ目は電動式です。これは電動モーターによって車輪を動かすことができるため、身体が不自由な方でも使いやすく、特に注目されています。

現在の車椅子の元となるものは20世紀前半にアメリカで開発され、その後軽量化されて広がりました。利用者のニーズに応えながら少しずつ改良され、長い歴史の中で変化してきたものが、今使われている車椅子なのだ考えると、身近なところに多くの方の強い思いと努力があるのだと感じました。

車椅子は、最新の技術によって大きく進化しています。車椅子で移動するときの最大のバリアは「階段」です。まだバリアフリー化されていない建物などでは、車椅子で上階に上ることはとても難しいです。その課題を解決するた

めに、スイスの大学生チームは、階段の上り下りに特化しその場で高さを調節することができる電動車椅子を開発しました。また国内でも、折りたたみ可能な電動車椅子が販売されており、少しの段差や衝撃ならば耐えることができるため注目されています。これらが大切にしていることは、暮らしにあるバリアや課題を車椅子の力で乗り越え、より良く充実した生活を送れるようにするということです。

車椅子の方の生活を支えるために、様々な場所でバリアフリー化が進められています。エレベーターがその良い例になっています。商業施設などのエレベーターには、車椅子専用ボタンがあります。エレベーターの課題は、降りるときに後方を確認出来ないことと、降りるときに扉が早く閉まることです。この対策として、車椅子専用ボタンは通常のボタンよりも扉の開放時間が長く設定されていて、車椅子の方が余裕を持って降りることが出来ます。またエレベーターの中に設置されている鏡も、車椅子で後方を確認して安全に降りるために必要です。そして公共交通機関にも多くの工夫があり、座間駅には、車椅子の方やご年配の方が使いやすいバリアフリー経路があります。また、車椅子対応トイレも設置されています。暮らしの中で様々なものが使いやすいように工夫されていて、それが全ての人の幸せにも繋がるのだと感じました。

私は、「知識があっても、思いやりの心がなければ相手を傷つけてしまう」ということを福祉体験で学びました。介助式の車椅子に乗って机の上のコップを取る体験があり、遠くにあるコップを乗っている人が身を乗り出して取りました。そのとき、いらしていた職員の方が「乗っている方が大変そうにしていたら、周りにいる人が助けなければい

けないよ。」と教えてくださいました。大切なことに気づいていなかった、ととても後悔しました。私達が普段何気なくしていることも、車椅子に乗ると出来ないことがあります。ただ車椅子のことを知って動く手助けをするだけでなく、乗っている方の気持ちを考えて気遣うことが大切なのだと気づきました。

これからは、自分の行動を車椅子を使用している方や困っている人の立場で考え、思いやりの心を持って生活していきたいです。

【小学校3・4年生の部 優秀賞】

福祉マーク

ひばりが丘小学校4年 井上 ハマーシャ光桜

私は、あまり福祉について知りません。でも、色々な福祉マークを見る事があります。はじめて福祉マークだと知ったのは、車イスの絵が書いてあるマークです。お買い物に行って、ちゅう車場に車をとめる時、「何であいているのに、車をとめないの？」と、お母さんに聞いた事がありました。「これは、体の不自由な人が乗っている車をとめる場所なんだよ。」と教えてくれました。

このマークは、「障害者のための、国さいシンボルマーク」と言うそうです。これをきっかけに他にも福祉マークがあるかを調べてみました。にんしんしている人のマークや、ハートと十の形のついた赤いマークやトイレの入り口や車にはってあるマークなど、意味や名前の知らない物ばかりだったけれど、色々な発見もありました。

去年ミュージカルのグループのみんなと、老人ホームに行っておじいさんや、おばあさんに、歌とダンスと、え顔をとどけに行くよていでした。でもコロナウイルスのえいきょうで、練習したけれど行く事ができませんでした。老人ホームに行く事はできなかったけれど、ビデオをとって、とどける事ができました。老人ホームのおじいさん、おばあさんたちは、とってもよろこんでくれたそうです。おれいに、手作りのふくろうのキーホルダーをもらいました。これも福祉のお手つだいの一つなのかな？と思いました。

マークをつけている人や体の不自由な人やおじいちゃん、

おばあちゃんたちがこまっていたらそっと声をかけて助け
てあげようと思います。

【小学校3・4年生の部 優秀賞】

「介助犬と一しょ」

東原小学校4年 小堀 楓佳

わたしがすんでいるマンションには、足がふじゆうで介助犬をつれた車いすの男の方がいます。

わたしはお出かけをする時によく見かけています。心配なのでお母さんと少し身守っています。けれどいつも見ているだけで何かすることは出来ません。

そんな時に男の方を見守ってくれているのが「介助犬」です。介助犬は男の方といつも一しょにいたので、男の方にとって、「介助犬」は、「大切な相ぼう」なのだともわたしは思います。いつでもそばで、大変な体を支えてくれているので、男の方の気持ちもうれしく元気になれると思います。

「介助犬が一しょなら心配ない」と、わたしは思ってしまいましたが、それでも、今度会った時には、自分に出来ることで支えていきたいと思います。

そしてもしもこれから男の方のような人を見かけたら、やさしく声をかけたり、あの介助犬のようによりそってあげたいです。

そのためにも、体が不自由な人は何が大変で、どんな手助けが必要なのかや、介助犬の仕事について知ることが大切だと思います。

そして、見守るだけでなく、声をかけたり行動したりすることで、気持ちが伝わっていくのではないかと思います。みんながだれかの「大切な相ぼう」になれたらすてきだな

と思いました。

【小学校5・6年生の部 優秀賞】

周りの人のやさしさ

相武台東小学校5年 前村 羽海

先日、街で目の不自由な人を見かけました。白い杖を使い、点字ブロックをゆっくり歩いていました。私は、「大変そうだな。心配だな。」と思いましたが、見ていることしかできませんでした。そのことを、帰ってお母さんに話してみると、お母さんのひいおばあさんも目の不自由な人だったと話してくれました。街で見た人と同じように白い杖で歩いていたそうです。自分の身の回りのことが一人ではできないので、会いに行った時はお母さんも手伝ってあげていたそうです。

私は、そういう人たちの気持ちが気になり、街で見かけた点字ブロックを、目をつぶって歩いてみました。すると、目の前は真っ暗で、たよりになるのは自分の足だけで、その足の感覚もくっをはいているのでつかみにくく、転ばないかとてもこわかったです。目の不自由な人たちは、毎日こんな思いをしているのかと思うと心配になりました。

でも、私は考えているうちに、ある事に気がつきました。それは、周りの人のやさしさや、温かさです。街で見た、目の不自由な人に、「大丈夫ですか。」と声をかけたり、道をふさがないようによけてあげたり。もしかすると、目の不自由な人は、そんな色々な人のやさしさに助けられているのかなと、思いました。そして、その手助けが少しでも目の不自由な人の不安を消せるのであれば、うれしいなと私は、思いました。

私も、もし次にそういう人を見かけた時は、道をふさが
ないよう気をつけたり、やさしい言葉をかけてあげたりし
たいと思いました。そして、目の不自由な人だけでなく、
体の不自由な人を見かけた時は、何か手助けをしてあげた
いなと思いました。

【小学校5・6年生の部 優秀賞】

「階段から落ちたおじいちゃん」

立野台小学校6年 倉石 佳奈

私のおじいちゃんは、私が二年生の時、家の階段から落ちてしまいました。おじいちゃんはその後、四カ月入院しました。入院しはじめは、車いすで移動していましたが、おじいちゃんが「歩きたい」と強く思い、リハビリの成果で少しずつ杖を使って、歩けるようになりました。

そして、退院することができました。その時、私はとても嬉しかったです。おじいちゃんは退院してから今まで、週二回のリハビリを頑張っています。今では、杖をつけて家の近くを散歩できるようになりました。

おじいちゃんは、家を移動している時などの生活でこまったり、不安なことがあるそうです。それは、階段や段差があり、不自由なことだそうです。おじいちゃんは、階段から落ちた後も、何度かころんでいます。それに、杖をつけて歩けても、どこか行くときなどには車いすを使用しています。その時、段差があると、つかえてしまいます。車いすではなかなか、段差をこえられません。

私はそんな時、スロープがあるところや、段差の少ないところなどの、車いすでも通りやすいところを案内していきたいです。そのために、じいちゃんに行くところを事前に調べ、素早く案内をできるといいと思います。

これからは、自分だけでなく周りを見て、こまっている人がいないか考え、行動していきます。おじいちゃんのように、体が不自由な人でも、過ごしやすい社会を作れるよ

う、広い視野を持っていきたいです。

【中学生の部 優秀賞】

「見えない不自由」を伝えたい

栗原中学校1年 池田 麻莉佳

みなさんは、「ヘルプマーク」というものを知っていますか。

「ヘルプマーク」とは、障害や疾患の基準があるのではなく、支援や配慮を必要とする「すべての人」が利用できるカードのことで、見た目からは分かりにくい障害、疾患をもつ方が周りの人に気付かれなかった時や、自分から援助を求めるのが難しい時に「見た目」で知らせることができるグローバルなマークです。

私が初めてヘルプマークという言葉を知ったのは、小学5年生の時でした。

実際にニュースで見た時には、ヘルプマークが担っている役割を聞き、私には見たこともないマークでした。ですが、今回私が福祉作文を書くにあたって真っ先に書きたいと思ったのがこの、「ヘルプマーク」でした。

私自身もヘルプマークについてもっと知りたいと思い、くわしく調べてみました。

まず、ヘルプマークの認知度についての記事を見たところ、意味もふくめて知っていた人が六割半ばで、くわしい意味は知らないと回答した人が二割超、知らないと答えた人が一割超えという結果が出てきました。知っている人の割合は年々増えてきているそうです。

ヘルプマークを知る人が増え、だれもが過ごしやすい世界に近づいてきている一方、知らない人も少なからずいる

という現状を知り、インターネットの記事や本だけでなく、このような福祉作文で、私の周りの人からその周りへと広がれば、それぞれが暮らしやすい社会にするための活動の手伝いができるのではないかと考えました。私にはできない大きな事でも、小さな事から始めれば少しずつ世の中は変わらと思うので、このような情報を発信できるように頑張りたいです。

そして、私が調べた中で最も心に残ったのが、「ヘルプマークを利用したくない理由」という、あるネット記事の調査結果でした。

ヘルプマークは市区町村役場の担当課窓口などで、だれでも受け取ることができ、裏面に特性や症状、お願いしたい対処法、緊急時の連絡先などを書くことのできる、命をつなぐカードでもありますが、つけるのをためらう人も多くいるそうです。

その理由の上位二位で、最も多い理由が「利用時の周囲の反応が気になるから」で、二位が「認知不足もあり役に立たないから」というものでした。

そのネット記事の中には、利用している方が周りに心ない言葉を発され傷ついた、という体験談も混じえられており、無知が招いてしまう不安というものを目の当たりにしました。

見えない不自由をかかえている方にとって、外出時の「お守り」となるヘルプマーク。

とても便利で、そしてとても簡単に受け取れてしまうため、健常者が悪用するという新たな課題もうき上がってきており、利用している方の信用が損なわれてしまうような、「絶対にあってはいけないこと」が起きてしまっています。

また、ヘルプマークの受け取りが困難な場合、事前申請をすれば制作ができるそうです。

ヘルプマークを利用する人が、周囲の目を気にしなければいけない、なんて人が一人でも減らせるよう、社会全体が理解を深めることがとても大切だと思います。

見える不自由も見えない不自由も、もっとたくさんの人に知ってもらうために、私は伝えていきます。

【中学生の部 優秀賞】

私達はみんな同じ

栗原中学校 1年 後藤 暖乃

世の中には、「音のない、無音な世界で生きる人」「真っ暗で、大切な人の顔や自分の好きな物を見ることができない世界で生きる人」「普通の世界で生きる人」「普通の人」「普通」ってなに？

私のおばあちゃんは、ガイドヘルパーという仕事をしています。ガイドヘルパーとは、障害者の外出に同行したり、移動をサポートする仕事です。おばあちゃんは主に、視覚障害の方のガイドヘルパーをしています。若い方から高れいの方まで。買い物に行ったり、洋服を買いに行ったり、カラオケに行ったりボーリングにも行くそうです。周りとなんにも変わらないのに私は「目が見えないから。」と言って同じ人間でも「自分とは全く違う人」だと思っていました。だから、「目が見えなくてかわいそう。」勝手な思いこみをして自分の中で線をひいて。

でも、そんな思いこみが変わったのは六年生の頃でした。ある日、学校の先生が、

「障害者と私達は違うと言うけど、耳がきこえないのだって、目が見えないのだってその人の特徴じゃん。私達にもあるでしょ？自分の特徴。だからみんな同じじゃん。」私ははっとしました。自分の中でひいていた線がきれいに消えていきました。

私は思いました。この世に「普通」というものはない。私達が勝手に「普通」と決めて思いこんでいただけだと思

いました。

それから私は「普通」という言葉を簡単に言わないように心がけています。「普通」という言葉を言われてきずつく人はこの世にかぞえきれないほどいると思います。でもいくら普通でも、目が見えず困っていたり、耳がきこえず困っている人がいたら積極的に助けに行こうと思います。

でも、目が見えない人、耳がきこえない人を理解していない人も沢山いると思います。少しでも理解する人を増やすためにはまず、障害者は私達と同じだと思う気持ちが大事だと思います。

誰もが、「私達と障害者は同じで違わない。普通とは私達がつくりあげたもの」と思えることができたなら、「人権問題」や「障害者差別は少しずつ減っていくと思います。

私は将来、おばあちゃんのようなガイドヘルパーにはなれませんが、障害者など関係無く、誰もが気軽にたちよれるカフェを経営したいと思っています。私はカフェとスイーツが好きで、カフェやスイーツの良いところを知ってもらうために、目が見えなかったら、スイーツの味やにおい、特徴を説明して楽しんでもらったり、耳がきこえなかったら、スイーツの見ためや、味、において楽しんでもらったり、どこも不自由じゃなくても誰もが楽しめるようにカフェを経営したいです。

これから私はいろんな人と出会い、経験を積み重ねていくと思います。その経験をカフェで活かしていけたらと思います。

私が大きくなっているときには、「人権問題」や「障害者差別」が無くなり、誰もが笑顔でいられるそんな幸せな社会になっていたらいいなと思います。

【小学校3・4年生の部 佳作】

車椅子の人のための市のくふう

相模野小学校4年 向井 奏帆

わたしは、イオンモールなどのショッピングセンターで車椅子の人を見たことがあります。スーパーなどはそのような人のためにどのようなくふうをしているのか、考えました。

まずは、洋服屋さんで洋服を選ぶ際に使う試着室、しょうがいのない人は一人が入るくらいの試着室だけど車椅子の人などは少し大きい試着室があり、そこで試着します。

お店のドアもおしたり手前に引くタイプのドアの場合、車椅子の人などは開閉がむずかしいと思います。自動ドアを取りつけています。

次は道のくふうです。歩道を広げたりして車椅子の人が通りやすくなります。段差などをへらし、通りやすくしています。

ショッピングセンター、道、色々な所でくふうがされています。車椅子の人は生活がしにくいけど市が協力して車椅子の人でも生活しやすい市になっています。

【小学校3・4年生の部 佳作】

高れい者への思いやり

相武台東小学校4年 平澤 心咲

私は、遊びに出かけた帰りに八十代くらいのおばあさんが買い物をしたあとの沢山の荷物を持っていて信号をわたっているのを見ました。とても重そうだったので、心の中で「重そうだな。手つだってあげたいな。」

と思っていました。でも、とてもはずかしくて声をかけたくてもかけることができませんでした。信号をわたりきっても道がいっしょだったので、ずっと気になっていました。ずっとどうしようかと考えていたら、三十代くらいの女せいの方が自分も荷物を持っているのに、

「大じょうぶですか、手つだいましょうか。」とおばあさんに声をかけてくれました。その時おばあさんはニコニコして、

「ありがとう。」

とお礼を言っていました。その時私は心の中で、

「私は、もっと速くから手つだえたのに・・・。」

と少しおちこみました。そして、

「あの方のようになりたいな。」

とも、思いました。

これからまた、このようなことがあったら、ゆう気を持って声をかけたいです。お手つだいでだけでなく、電車やバスの席を、高れい者や病気を持つ人などにゆずって行って、たくさんの人が幸せな生活を送ってほしいと思います。

【小学校3・4年生の部 佳作】

人のやくに立つ人

東原小学校3年 山本 玲菜

私は、耳の聞こえない人のことを、さいしょは自分一人ではこう動できないと思っていました。でもある日、ニュースで耳の聞こえない人のことをアナウンサーの人がせつめいしていました。そこで私は初めて、ほちょうき、手話という言葉を知りました。ほちょうきは、耳の聞こえない人が少しでも音が聞こえるようにする物です。手話は、手の動きだけでお話することです。

私はえきで、えき員さんと、耳の聞こえない人が紙に言葉を書いて話しているところを見かけました。その数日後に、私は耳の聞こえない人が、ポケットから物を取り出す時に大事な家のカギをおとしているところを見ました。でもその人は耳の聞こえない人なので気づいていませんでした。けれど、社会人ぐらいのお姉さんがひろってわたしてあげていたところを見ました。お姉さんはゆう気があってすごいなあと思いました。そして私はお姉さんを見て、私も少しでも人のやくに立つ人になりたいなあと思いました。

私はこれから、こまっている人を見かけたら、ほうっておくんじゃなくて、助けてあげたいです。たとえば、耳の聞こえない人にはかたをトントンして、教えてあげたり、紙に言葉を書いてつたえたりしたいです。目の見えない人だったら、やさしい声をかけてつたえてあげたりしたいです。私は大人になったらしょうがいしゃや、お年よりの人や、こまっている人の気持ちを少しでも考えてりっぱな大

人になりたいなあと思いました。

【小学校3・4年生の部 佳作】

「うでのない人」

立野台小学校3年 佐藤 志歩

わたしは二年生の時いつも通り下校をしていると、うでのない人を見かけました。とてもたいへんそうに見えました。

その週の土日にわたしは、右うでを使わずすごしてみました。とてもたいへんで思わず使ってしまった。右うでを使わずに生活をしたりごはんを食べたりできているなんてとてもすごいと思いました。

なぜかというと、「ふつうの人」はふつうのくらしをしているとき手や足を使うのに、うでや足がない人はふつうのくらしをすることかむずかしいのではないかと思ったからです。

わたしにはりょううでがあります。だからうでや足がない人の気持ちがわかりません。でもいつか体の不自由な人でも当りまえに生活できる時が来たらいいとわたしは思っています。そのために、自分ができることを、さがしていきたいです。

【小学校5・6年生の部 佳作】

小さな一歩は大きな助け

座間小学校5年 郎 林溪

ぼくは、習い事の帰りに座間図書館や谷戸山公園を通ります。その時に、よくお年寄りを見かけます。元気に運動をしている人もいれば、散歩している人もいました。中には、重い荷物を持っている人もいました。それを見て、助けたいとぼくは思いました。しかし、声をかける勇気がなく、その思いを行動にうつすことができませんでした。けれども、ぼくは声をかける勇気がない以外にも理由があると思い、考えてみました。そして、浮かんできたのは、自分がお年寄りの気持ちになりきれないということです。なので、両親が出かけている間に、ある実験をしてみました。その実験の内容は、家の中から、重い物を取り出して、5分間家の中を歩いてみるということです。重い物だと、2分間歩くだけでも、もう息が切れてしまいました。若いぼくが2分で息が切れるということは、お年寄りの場合だったらもっと短い時間で息切れしてしまうということがわかりました。こうなると、日常生活まで不便になるのではないかとぼくは思いました。この実験をしたことで、少しお年よりの気持ちに共感できたのではないかと、ぼくは、思います。この実験を生かして、今度、お年寄りに会った時は、大変さに共感し、気持ち良く手伝ってあげたいです。そして、その小さな一歩を大きな一歩にし、少しずつ、自分のペースでお年寄りを助けていきたいと思っています。

【小学校5・6年生の部 佳作】

募金の大切さ

相武台東小学校6年 井上 柚茉

みなさんは募金をしたことはありますか。私は、買い物をしに行ったお店の会計をするところに募金箱があり、よく募金をします。募金をした募金箱にはたくさんのお金が入っていました。募金箱に入りきれないくらいまで入っていることもありました。この寄付したお金は必ずだれかを助けることができます。

寄付したお金の7割はその募金の目的に使われます。残りの3割は広い区いきでの活動や災害のときのそなえなどに使われます。私はあまりこのことを知らなかったので、知ったとき自分が寄付したお金がたくさんの人のためになっているんだと思いうれしかったです。募金箱に入りきれないくらいに入っていたお金もたくさんの人のために使われていると思うとすごくうれしかったです。募金は小さなことかもしれないけれど、助けを求めているだれかを救うことができるすごいことなんだなと思いました。今度、委員会で募金活動をします。とくに何も思わず、募金のポスターを作っていました。募金のすごさに気づいたので、募金活動をがんばりたいと思います。

募金は、みんなが寄付したお金が1つの力となり、だれかを助けることができる素晴らしいことなんだと思いました。いつか、募金がなくなるくらい世界でだれ1人不自由なく生きられるようになってほしいなと思いました。

【小学校5・6年生の部 佳作】

私の思う「みんなの幸せ」

入谷小学校6年 渡邊 奈那子

「みんなの幸せ」ってなんだろう？今回の福祉のテーマを広げていて思ったことの一つだ。

つい先日GWに家族で京都旅行に行ってきた。とても混んでいた。みんなごつつんごつつん当たってそれなりに痛いはずなのに笑っていた。それに暑い。帯を締めている人もいる。なのに笑っている。この笑っているのがみんなの幸せなのだろうか。私はそう思った。そして同時に興味ももっていった。

まず「私の幸せ」について考えてみることにした。私が幸せになるのは「楽しかった時」「笑った時」。あとは「うれしくなった時」。いくつかならべて見ていると私は気づいた。「いい感情」をもった時に幸せになる。そう気づき思った。

次に考えたのがそれはいつ感じるのかだった。「うれしい」は「ほめてもらった時」や「なにかが成功した時」に感じる。でも「なにかが成功した時」は楽しいとも思う。一つの行動から2つ以上のいろどり豊かな感情が出てくる。もしかしたらこの感情全てが「みんなの幸せ」なのかもしれないと私は思った。

そして最後にそれはどんな状態でもそう思うのかと疑問にぶつかった。たとえ病気になったとしてもそう思うのかと思った。

私のおばあちゃんは病気になり車イス生活になった。う

まく自分の思い通りにならなくなったけれど笑っていたし楽しそうだった。時には感想も言ってくれて幸せそうだった。それは支えてくれた人がいたからだと思う。私は支えた人の一員だった。でも一度も「いやだ」と思ったことはない。むしろ幸せだった。つまり支えてもらっている人も、支えている人も幸せだったということになる。そこで私は「みんなの幸せ」は人それぞれなのかもしれないと思いを考えた。

私は一つ提案をする。「みんなのそれぞれの幸せ」をそんな重できる社会になればいいと思う。そのために「みんなの意見」を大切にしてそれぞれがそれぞれの意見をそんな重できる世界にするため私の周りから広げていきたいそう思った。

【中学生の部 佳作】

小さな気づかい

東中学校 2年 茂原 柚月

私は中学校に入ってから、部活の大会や友達と出かける日など、電車を利用する機会がととも増えました。そして電車に乗ることが多くなってから、「優先席」についてときどき考えるようになりました。

優先席は、高齢者・体の不自由な方・妊婦さん・乳幼児を連れている方などのための席です。でも朝や夕方などの人が多くなる時間帯に電車に乗ると、高齢の方がいるのに優先席でスマホをいじっている人や、赤ちゃんを抱えている方がいるのに優先席に友達と座って話している人をみかけます。

前に電車に乗った時、優先席がうまっていて座れずに困っているおばあさんがいました。電車が動き始めてふらついているみたいだったので声をかけようとした時、近くにお姉さんがおばあさんにかげより、声をかけて荷物を持ってあげていました。おばあさんの手を取って、しっかりと支えているお姉さんの姿と、おばあさんの安心したような笑顔をすごく覚えています。本当はみんなが席をゆずり合えるのが1番だけど、このお姉さんのように周りを見て自分ができることをすぐにみつけて、すぐに行動に移せる人になりたいなと思ったし、小さな気づかいを当たり前のようにできるようになりたいと思いました。

そしてつい最近、混んでいる時間帯に電車に乗った時、前と同じように席に座れなくて困っている、つえをついた

おばあさんがいました。たまたま席に座れていた私は、勇気を出して声をかけ、席をゆずってみました。すると、おばあさんはとても笑顔で「ありがとう」と言って下さり、その後少しお話をした中で何度も感謝を伝えて下さいました。

私は電車の中での出来事から、少しの気づかいで人を笑顔にすることができると気づきました。自分が見逃しているだけで、周りをよく見れば困っている人がいるのかもしれないと思うようになりました。そして私は困っている人がいれば当たり前前に声をかけ、当たり前前に手をさしのべて相手を助けるということをみんなができるようになったら、もっと笑顔でいられる人が増えると思います。なので自分自身がこれからもっと周りに目をむけ、自分にできることを考えそれを実行できるように、普段から心がけていこうと思います。それが「当たり前」にできるようになったら、電車であのお姉さんを見た私のように、周りにも目をむけようと思う人が増え、笑顔も増えたらいいなと思いました。

【中学生の部 佳作】

知るということ

東中学校 2年 本橋 夏音

社会では、どんな人でも暮らしやすいよう、たくさんの工夫がされている。だが実際、誰もが安全に、安心して暮らせる環境だと言えるのだろうか。

例えば、エレベーターにある鏡。あれは本来、車椅子の方が向きを変えずに降りられるように設置されているものだ。だが、それを知らずに鏡の前に立つ人もいる。鏡があっても、遮られては意味が無い。物を活用するには、それを知る必要があるのだ。では、用途を知ればそれでいいのか。私はそれも違うと思う。

点字ブロックは、視覚障がい者が安全に歩行するためのものだ。これは、誰もが知っているといっても過言ではないだろう。でも、その上に自転車が停まっていたり、物が置いてあることがある。何の為にあるのか分かっているはずなのに、なぜこのようなことが起こるのだろうか。それは、「重要性」や「大変さ」を知らないからだと思う。視覚障がい者にとって点字ブロックは、危険な場所を知る手段になる。言い換えれば、これがないと気づけない危険がある、ということだ。私は、この考え方が必要だと思う。

「どうしてあるのか」から、「ないことで困ることは何か」と考えることができれば、その重要さ、それがなくことによる大変さに気がつけるはずだ。もちろん、実際に体験してみないと分からないこともあると思うが。

私は、誰もが暮らしやすい社会にしていくために、まず

はお互いを知ることが大切になると思う。障がい者に対してであれば、生活する上で大変なことは何か、それを支える設備には何かがあるかを知る。そして、その使い方や、それが使えないことで困ることは何かを知る。そこから、自分にできる支援を考え、理解し合うことができれば、より多くの方が生活しやすくなると思う。

自分は簡単にできることでも、難しいと感じる人もいる。だから私は、より多くの人に、様々な人のことを知ろうと思ってほしい。そして、私自身もまだ知らないことが多い。これから色々なことを知り、できることを探していきたい。

【中学生の部 佳作】

お父さんの仕事

栗原中学校1年 古賀 はるの

私は、「福祉」という言葉を何度も耳にしてきました。ですがその「福祉」という言葉の意味を考える機会があまりありませんでした。そんな私がイメージしていた「福祉」は、障害を持った人や身体が不自由な人、高齢者の方々が利用するサービスのような印象をもっていました。しかし「福祉」について調べてみると、「全てのいのちを大事にすること。」そして「ふ」だんの「く」らしを「し」あわせに、この三つの文章の頭文字をつなげると「ふくし」になるように私も含めて、特定しただれかのためではなく、「みんなが明るく楽しい生活を送れるように」取り組む活動だということがわかりました。いろいろな施策や福祉サービス、ボランティア活動、などがあることがわかります。

今回、私がこの福祉作文を書いてみようと思った理由は、私のお父さんです。私のお父さんは、児童養護施設で働いています。なので私は、自分に身近な児童福祉について考えてみました。児童養護施設では、様々な理由で親と一緒に生活できない二歳から十八歳までの子どもが生活しています。そこで生活している子どもたちは私たちと同じように学校に行くし、自分のことは自分でやるそうです。私は小さい時、お父さんが学園の子たちと公園に行ったり、スポーツをしたりどこかへ連れていってもらったりしているのを見て羨ましがっていました。学園には、園庭もあったのでたくさんの職員さんと遊んだり話したりしている子た

ちを想像して「いいなあ」と思うこともありました。その話をお父さんにしたところお父さんが、「もし自分が家族と別々で離れて生活することになったらどう思う？」と言われて考えてみると今まで当たり前のように一緒に生活してきたので考えたこともなく、想像もしたことはありませんでした。ですが今、考えてみると、それはとても辛くて、寂しいことだと思いました。そのようなことを思ってから私は、児童福祉に興味を持ち始めました。施設で生活する子がなぜ施設で生活することになったのかなど、詳しいことは教えてもらえませんでした。ですが施設ではどんな生活をしているのか、施設を出たらどうするのか、そのためにどんな準備が必要なのか教えてもらいました。基本的に子どもたちは高校を卒業すると施設から出るそうです。お父さんの仕事の一つは、子どもたちがそれまでに自立できるようにすることだそうです。その為に、掃除や洗濯など身の回りのことを普段から自分でやれるように取り組んでいるそうです。

お父さんの仕事を通して、様々な境遇で生活している子がいることを知ることができました。私は親にしてもらっていることを当たり前だと思わずに自分が自立する力をつけるためできることはしっかりしたいです。またこれからたくさんの人たちと接する機会があると思いますがみんなにとって幸せな選択が出来る自分でいたいと思っています。

福祉推進標語

【最優秀賞】

つづいてる やさしさのバトン あなたの番

座間小学校 3年 三島 瑞葉

【優秀賞】

優しさが しあわせ生み出す 原動力

東中学校 1年 金子 愛理

多様性 理解深める 思いやり

東中学校 1年 染谷 まりの

【佳作】

だいじょうぶ？ そのきづかいが だい一歩

ひばりが丘小学校 4年 永野 優姫

「お手伝いしましょうか」の一言で

笑顔あふれる 座間の街

栗原中央在住 安藤 史郎

勇気だし 声をあげよう 手をのばそう

わかってくれる 人がいる

緑ヶ丘在住 高田 孝子

まわりのひとにやさしくされたよ

わたしもみんなにやさしくしたい

東原在住 レスコ 摩耶

令和 5 年 9 月

座間市福祉部地域福祉課 作成